

362

精神國防叢書第一篇

特240
646

元代議士
日蓮僧
植竹龍山述

天皇本尊論

大日本四恩會發行



始



特 240
646

天皇本尊論 目次

一千餘年來の大きな謎…………… 一頁

天皇本尊提唱の第一聲…………… 二

天皇本尊の本據如何…………… 四

本尊不敬論を何とするか…………… 六

釋迦本尊か太神本尊か…………… 七

敢て反對者に物申す…………… 一〇

法神一體不離の妙境…………… 一二

天皇本尊への大躍進…………… 一四

宗門超越の重大問題…………… 一五



日本本尊論 完成

元代議士 植竹龍山
日蓮僧



植竹龍山

な謎がある。

一千餘年來の大きな謎

佛教は、我國に於て一千餘年の存在を續けて居るが、何故シツクリと國民心理の上に喰ひ入らないのであらうか。いひかへると、何時までたつても眞の國民的宗教となり得ないのであらうか。茲に日本精神文化の上の大きな



恐らく何人でも之を自覺してゐるであらうが、之を解決し得ないところに問題がある。國民的宗教を何うするかといふ立場から見れば、それは歴史的な重大缺陷である事は争はれない。此の缺陷に乗じたものが、由來皇道を偽装してゐる邪教の群である。いはゆる邪教は、申合せた如くに神道の一分派であると稱してゐながら、彼等には宗教的信仰の眞の對境とするに足るべき本尊がない。それが邪教に墮して行く根本的な主因であるのに拘はらず、正統派の神道家も之を傍觀して居れば、既に國民的宗教の自任に立つてゐる佛教家も一向に之を顧みやうとはしてゐない。我國の教壇に於ける此の大きな謎を、果して何人が解くであらうか。

天皇本尊提唱の第一聲

かうした教壇の雰圍氣の裡に、かねて『世界統一の本尊』の編者として聞えた高橋善中氏の新著に於て『天皇本尊』の提唱を見るに至つた事は、慥に時代の要求に應ず

べき宗教上の劃期的一問題たるはいふまでもない。これは或る意味に於て神佛二道に對し、又少なくとも全佛教に對しての革新的烽火であると見なければならぬ。

本來『天皇本尊』の概念的解釋からすると、今更高橋善中氏の提唱を待つまでもなく、現人神にまします御歴代の天皇を我等日本國民の御本尊と仰ぎ奉る事に何の問題も起るべき筈はない。それはいふ迄もなく國民的信念の中心にましますからである。然るに之を宗教上の所談とする場合に、いろ／＼な問題が起つて來る。佛教上から見ると、あらゆる宗派を通じての印度式佛教と日本式佛教との相違から、幾多の問題の持ち上る理由がある。なぜかとならば、各宗各派を釘付けにしてゐるいはゆる傳統そのものがあるからである。傳統の繫縛の下に進歩はない。發展の自由は、全く奪はれてゐるとさへいへる。現に兵庫縣の徳重某から提起された眞言宗・禪宗乃至日蓮宗の教義に關する不敬告發事件の如きも、その歸する所、日蓮宗の場合でいふと、各派それぞれ／＼各自の傳統を楯に取り、印度ずりの『佛本神迹』説と、之を否定して日本式に

恐らく何人でも之を自覺してゐるであらうが、之を解決し得ないところに問題がある。國民的宗教を何うするかといふ立場から見れば、それは歴史的な重大缺陷である事は争はれない。此の缺陷に乗じたものが、由來皇道を僞裝してゐる邪教の群である。いはゆる邪教は、申合せた如くに神道の一分派であると稱してゐながら、彼等には宗教的信仰の眞の對境とするに足るべき本尊がない。それが邪教に墮して行く根本的な主因であるのに拘はらず、正統派の神道家も之を傍觀して居れば、既に國民的宗教の自任に立つてゐる佛教家も一向に之を顧みやうとはしてゐない。我國の教壇に於ける此の大きな謎を、果して何人が解くであらうか。

天皇本尊提唱の第一聲

かうした教壇の雰圍氣の裡に、かねて『世界統一の本尊』の編者として聞えた高橋善中氏の新著に於て『天皇本尊』の提唱を見るに至つた事は、隨に時代の要求に應ず

べき宗教上の劃期的一問題たるはいふまでもない。これは或る意味に於て神佛二道に對し、又少なくとも全佛教に對しての革新的烽火であると見なければならぬ。

本來『天皇本尊』の概念的解釋からすると、今更高橋善中氏の提唱を待つまでもなく、現人神にまします御歴代の天皇を我等日本國民の御本尊と仰ぎ奉る事に何の問題も起るべき筈はない。それはいふ迄もなく國民的信念の中心にましますからである。然るに之を宗教上の所談とする場合に、いろ／＼な問題が起つて來る。佛教上から見ると、あらゆる宗派を通じての印度式佛教と日本式佛教との相違から、幾多の問題の持ち上る理由がある。なぜかとならば、各宗各派を釘付けにしてゐるいはゆる傳統そのものがあるからである。傳統の繫縛の下に進歩はない。發展の自由は、全く奪はれてゐるとさへいへる。現に兵庫縣の徳重某から提起された眞言宗・禪宗乃至日蓮宗の教義に關する不敬告發事件の如きも、その歸する所、日蓮宗の場合でいふと、各派それぞれ、各自の傳統を楯に取り、印度ずりの『佛本神迹』説と、之を否定して日本式に

建直さうとする「神本佛迹」説とが對立して、そこに統一せる正見が確立して居ない爲め、かやうな誤解を受ける事にもなつたのだ。

然らば高橋氏の提唱された「天皇本尊」説の内容は果して如何なるものか、今之を一應検討してから、神佛の本迹關係即ち日本佛教と印度佛教とについての卑見を述べたいと思ふ。

天皇本尊の本據如何

余は先づ高橋善中氏が、「釋迦本尊」乃至「法華經本尊」から「天皇本尊」に躍進した理由を確かめて見なければならぬ。

高橋氏は、その論據を日蓮聖人の王佛一乗の教旨に置いてある。いふところは、印度式の佛本神迹説を排して、それを逆に神本佛迹に建直したものであつて、此の神佛關係を顛倒した佛教觀こそ、日本佛教の眞の姿であるとして、之を廣く我が全佛教各

宗各派に呼び掛けてゐるところに、輪廓の大きな提唱の本旨が窺はれる。

高橋氏によると、「日蓮聖人は、結局妙法蓮華經を以て本尊とされてゐる。この妙法蓮華經こそは宇宙生命の本源、十方世界の本尊である。今吾々は事實として、何處にその宇宙生命の全體を有つてゐる本尊を求むべきであらうか。私は今これを我が日本の天皇、上御一人に認め奉るものである。これがひとり日蓮聖人の王佛一乗の教旨に適ふのみではない、釋尊既に此の我が天皇を轉輪聖王といはれ、法華經には、

其祖轉輪聖王

と説かれてあり、日蓮聖人は、この轉輪聖王を本地身の佛と斷じてゐる。釋尊は此の本地身の佛、即ち本佛に依つて佛道を成じたのであるから、それが又同時に天皇本尊の本據でもある。隨て我が惟神の道も、この佛の本地身を説かれた法華經と一如すべきものであつて、所詮法華經は日本國でなければ成立しないと共に、日本國は法華經ならでは、眞にその使命を果し得ないものである」としてある。

本尊不敬論を何とするか

かうして『天皇本尊』が確立せられ、そこに日本佛教の建直しが完成されたならば、本尊の儀相に對する見解も亦自ら正道に還るべきである。元來日蓮宗の大曼荼羅に

南無妙法蓮華經（天照太神
八幡大菩薩）

とあつて、中央に兩皇太神を勸請し奉り、兩側に十界を圖現されてあるのは、神本佛迹の何よりの論據で、日蓮聖人の正意たる純日本佛教の建前が、嚴然と此の文證（大曼荼羅こそ無二の文證ではないか）の上に表はれてゐるのである。

此の如く、文證極めて明白であるのに、彼の印度式佛教徒が冠履顛倒の甚しい『佛本神迹』の傳統に囚はれてゐる爲めに、佛即ち釋尊が本地であり本店であつて、神即ち我が天照太神を始め奉つて、御歴代の上御一人は佛の垂迹であり出店であるといつたやうな邪見に陥つて、眞言宗の本地垂迹の説と同じ様に、太神を冒瀆し奉る事にな

り、例の徳重某から告發されて、あられもない不敬呼ばはりを受けても、一門の學匠達が一言の辯明さへ出來ないといふ情けない事にもなるのだ。清水龍山師及其の一門が、現に『佛本神迹』を力説しつゝ、本尊不敬告發の裏書をして居るのも、畢竟その傳統が、何處までも印度ずりに出來上つて居つて、日本佛教の正意を解しないからであるとの批評を免れないであらう。

釋迦本尊か太神本尊か

さうなると、印度佛教とは何か、日本佛教とは何かといふ事が問題になる。普通の佛教は、概ね印度式の佛教形態を備へて居るのを常とするが、同じ日蓮門下の宗派の中でも、明かに印度佛教と日本佛教とが對立してゐる。少なくともその傾向にハッキリとした差別が表はれてゐる。

その差別の主體は何かといへば、釋迦如來を主とするものが印度佛教であり、日蓮

聖人の正意に依つて、天照太神を主とするものが日本佛教である。釋尊を主とすれば太神を従とする事になるから佛本神迹となり、隨て太神を主とすれば、釋尊が従となるから神本佛迹となるといふのであつて、その道理明確である。今日蓮宗の立義に就き、一應文獻に依つて検討して見ると、日蓮聖人の印度佛教と日本佛教とを比較對照した妙判極めて凱切なものである。之を要約すると、(諫曉八幡鈔)

印・度・佛・教

天竺國をば月氏國と申すは、佛の出現し給ふべき名也。

月は西より東に向へり、月氏の佛法の東へ流るべき相也。

月は光あきらかならず、在世は但八年也。

佛は法華經謗法の者を治し給はず、在世には無きゆゑに。

日・本・佛・教

扶桑國をば日本國と申す、豈に聖人出で給はざらん。

日は東より西へ入る、日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相也。

日は光明月に勝れり、五五百歳の長き闇を照らすべき瑞相也。

末法には一乗の強敵充滿すべし、不輕菩薩の利益此れなり。

とあり、特に「本尊鈔」には、「彼^ハ脱、此^ハ種也。彼^ハ一品二半、此^ハ但^レ題目^ノ五字也」とあつて、同じ佛教であつても、彼は天竺國の月の佛教、末法の機に適せぬ脱益、畢竟文上の教相に過ぎないが、此は日本國の日の佛教、文底の本因妙を説く所の下種の佛教であるとの意で、彼我佛教勝劣の判釋斯くも明白である。

佛教は空中電氣ではないから、地上に即した歴史上の事實を無視すべきではない。釋尊の生れた印度は、既に年久しく亡國の憂き目を見て居り、本國土妙も何もあつたものではない。佛教そのもの、衰滅も已むを得ないのだ。之に反して天照太神御出現の皇國が、國運隆々蔚然たる威容を示して居るのも當然である。此の活きた事實に對する認識を全く缺いて、今頃印度佛教の陋習に泥み、日本佛教の潑刺たる眞生命を無

視して居る如きは迂濶も亦甚しいではなからうか。

斯くして釋迦本尊は御役目ずみである、去年の曆である、茲に末法應時の眞日本佛教は、天照太神本尊でなければならぬ—との斷案が生れる。

敢て反對者に物申す

皇太神本尊の論據を明す前に、一言反對者に物申したいのは、日蓮宗の本尊が何故に不敬告發の目標となつたかの點である。國體開顯の恩師と讃へられ、勤王の聖者と歌はれた日蓮聖人が、何故に大義名分を明かにした歴史的事實まで葬られて、その嚴撰に繋る本尊が不敬呼ばはりされるのか。これといふのは、畢竟日蓮聖人の正意に背き、純日本佛教の論據を歪曲して、古色蒼然たる印度より佛教に逆轉した教團があるからである。

事實は、何を物語るか。

印度佛教の言ふところを指摘して見ると、徳重某でなくとも、不敬に亘ると斷じ得る事實が歴然と存在してゐる。

その顯著なるもの、一は、十界勸請の俗見である。一般日蓮宗は南無妙法蓮華經—天照太神・八幡大菩薩と、此の兩太神を勸請し奉つた本義を忘れて提婆達多、鬼子母神等と同様に天照太神を單なる法華經の守護神と見做して居り、中には妙見・七面天女・稻荷等とごつちやにしたものさへある。いかに最負眼に見ても、不敬の咎めは免れず、あり／＼と世間の邪教に同ずる色彩さへ見えるのは言語道斷である。

印度佛教の徒は、釋迦像を本尊としてゐるが、此處にも根本的な錯覺がある。本來色相莊嚴の釋迦像なるものは、斷じて末法下種の本尊ではあり得ない。『法華經の題目を以て本尊とすべし』(本尊問答鈔)とあるのが、端的なる色相莊嚴の釋迦像否定である。色相莊嚴の佛像は、在世並に正像時代に於ては、本已有善の衆生を利益するに効果があつても、末法の本未有善の機に對しては全然時代錯誤であつて、當今は法華經

の肝心たる文底下種の題目を唯一の本尊と爲すべきである。要は惡凡夫充滿の現代には金色佛の利益がないから、形像等を安置せずに「如來とは、總じて（中略）無作三身の寶號南無妙法蓮華經也」（御義口傳）の金文に鑑みて、重々の佛像否定を味はなくてはならない。その上、佛像なるものは、一機一縁の本尊であつて、十界互具の本尊たる本質から見ると、たとひ之を二尊四菩薩として崇めるとも、十界を具備しないから、妙法の實義と一如して居らず、これは一種の偶像であると貶せられても致方がないではないか。

印度ずりの佛教信者が、由來日本國民としての意氣に於て缺けた憾みがあるのも、蓋し誤つた本尊に禍されて居るのであるとさへ見られる。

神法一體不離の妙境

そこで問題は、皇太神勸請の文證であるが、これは今改まつての詮議ではない。前

掲の如く、大曼荼羅所現の南無妙法蓮華經―天照太神・八幡大菩薩と勸請し奉つてあるのが何よりの文證であり現證であつて、久遠實成の本法を法華經の本國土たる日本國に對して、如實に具現遊ばされたのが天照太神にましますのだと見奉るべきである。日蓮聖人は、

日本とは、法華經の國なり。

本有の靈山とは日本國也。乃至所謂大曼荼羅の在所なり。

と言明された。そもく南無妙法蓮華經とは、宇宙の妙理天地の大經であつて、諸法實相そのもの本體、即ち法華經の肝心である。此の肝心そのまゝが我が惟神道であり、皇道であるから「日本は法華經の國」である。されば申す迄もなく此の皇道の具現者にまします天照太神と南無妙法蓮華經とは一體不離である。此の信念から見るならば、純日本佛教に於ける皇太神本尊の論據は極めて明瞭である。

天皇本尊への大躍進

印度より佛教を顛倒是正して、日本佛教の網格を掴むならば、そこに天皇本尊の根本義が成立するの理は、上來大要その本筋を明し得たと信ずる。

天皇本尊が確立すれば、それが佛教の日本化完成上の畫龍點睛であつて、千有餘年の間、何故に佛教が國民的信念と融合歸一の妙境に達しなかつたかといふ歴史的大きな謎の解決である。即ち釋迦本尊から皇太神本尊・天皇本尊への大躍進といはねばならぬ。日蓮聖人は、

日本國と申すは、天照太神の日天にてましますゆゑなり。

日本國の王となる人は、天照太神の御魂みたまの入りかはらせ給ふ王也。

といはれた。即ち天照太神そのまゝ、歴代の上御一人に渡らせられる。皇太神本尊即天皇本尊である。此の意味にて「日天にてまします」天照太神の御法魂は永劫無終の未

來へかけて、御皇運いや榮えに榮えさせ給ふ御皇統の御生命にましますのである。茲に神と申すのは、地理的に小さい日本國の小神格ではなく、宇宙法界の大善神としての大神格を顯現せる現人身を拜するの謂である。天壤無窮の御神勅は、此の大神格の御發動である。日蓮聖人は「日本とは世界なり」といはれたが、此の聖斷が、今現に眼前の非常時を通じて、事實となつて展開しつつあるのを見れば、兩皇太神の勸請に依つて、純日本佛教の網格を基礎づけ、それが「天皇本尊」となつて、日本全國民信仰の正境と仰がれる事は、まことに無理のない日本的宗教の確立完成といはねばならないのである。

宗門超越の重大問題

皇太神を本とするの説は、日蓮聖人の妙判に依つて、七百年前既に早く明示せられたところであつて、決して余の私見ではない。

高橋氏の一投石に事始まつて、神佛兩教殊に日蓮宗方面には、物情騒然たるものがあるであらう事が観察される。が、これは一日蓮宗の問題ではない。否、寧ろ各宗各派を超越すると同時に、各宗各派共通の重大問題といはねばならぬ。故に各宗各派共に一切の感情的行掛りを捨て、中正無私、本來の國民性に立ち歸つて之を研究し、純日本的佛教を完成して、日本精神發揚上に於ける一個の推進力としての新しい存在を一般社會に再確認せしむる爲に、その神髓たる『天皇本尊』の確立に協力邁進すべきであると信ずるものである。敢て大方識者の示教を望む。

(終)

昭和十二年十月十三日印刷
昭和十二年十月十六日發行

不許
複製

【實費頒布】

著者 植竹龍山

發行者 山崎照道
東京市世田谷區下馬町二丁目一三〇

印刷人 水野俊次郎
東京市中野區本町通一丁目一

印刷所 水野印刷所
東京市中野區本町通一丁目十三
電話中野七〇二二番

東京市中野區本町通一丁目一番地

發行所

大日本四恩會

電話中野七〇二二番

「世界統一の本尊」編者

高橋善中居士新著

大忽好評
再版

天皇本尊

定價五拾錢
送料六錢

◆日本精神具現の金字塔!!

『天皇本尊』の一語、何たる輝かしい日本精神の經典化であらう。日本全國民の燃え上る信念が、此の一書に盡されてある。日本人の眞の宗教は、これより外にはない。佛教は一千餘年も掛つて、何故日本人のものとなり得なかつたか。非常時の要求に答へて此の大問題を解決したものが本書である。本書出で、宗教界の物情騒然たるのは偶然でない。

發行所

東京市杉並區高圓寺四ノ五五六

和黨會書院

振替口座東京九九〇二〇番

要目一斑

- 一、本尊の意義
- 二、諸宗教の本尊
- 三、天皇本尊の本尊
- 四、日本國體と法華經
- 五、日本國體と天皇
- 六、皇道と王道
- 七、大日本と世界統治
- 八、日本佛法の使命
- 九、諸宗教の統制整理
- 十、或問三答(以上)

終